

たぐみ

Craftsmanship

特集 “琉球の美” を伝える 〈沖縄の手仕事〉 第48号

義務教育の

デジタル化を考える

近ごろインターネットや携帯電話の機能が急速に進化し、グローバルな情報の検索や伝達が瞬時に行われるようになった。先日もテレビで、携帯電話販売一位のソフトバンクの孫正義社長が政府の閣僚や学者たちを前にして、義務教育の教科書の電子化について力説していた。

孫社長によれば、小学校、中学、高校のすべての教科書を電子ノート化して生徒に持たせれば、進級するたびにチップの交換だけで済み、結果的に経費の節減にもなる。おまけに宿題や家庭への連絡もそのつど入力させれば一石二鳥で、余計な本やノートなど持たない分、生徒の負担が軽くなるという。

小、中、高校の教育を受ける生徒の絶対数もこれからは増えず、電子教科書・ノートを採用する初期費用は増えるものの、次年度からはチップの交換だけで済むから毎年数千億円の節約に

なるとの説明であった。

孫社長の話は、そのことがまさにこれからの社会を変えるかのごとくであった。そう、確かに変わるかもしれない。指先の、手なれた、素早いキー、いや画面の操作は、脳の神経を十分に活性化することなく、与えられた情報を処理し、記憶していく。そこには子どもたちの個性や多様性への配慮などみじんもなく、また教師一人一人の思いや体験など伝えようもない。

それだけではない。何億冊もの教材が作られなくなることで日本の教科書業界はどうなるのか。出版、印刷、製本、そして製紙業、そのいずれもが壊滅的な打撃を受けることになる。

人類の歴史の中で、言葉が生まれ、農業が育ち、生産物の記録として文字が創られた。そして記録の方法として紙に筆写し、あるいは木版や活版で印刷をする技術が発達した。そのような中で人の知力は成熟し、文化が形成されたのである。

(次頁へ)

出雲和紙の人間国宝安部栄四郎はかつて「大正の初めごろ紙漉きの技術を習得した当時、すでに日本の伝統的な和紙の未来は暗い、と聞かされていた」(『手漉きの和紙』竹尾洋紙店刊)と書いている。もとより明治初年ごろ移入された機械抄紙の隆盛に押されたからだが、いま、ひよつとすると大手製紙会社の作る新聞用紙を筆頭に、機械抄紙の生産すらが産業として成立しない時代が来たのかもしれない。

アメリカをはじめ世界中で広告料の激減やネット配信などで新聞という事業が危機状態にある。こういった事態をどう考えたらいいのだろうか。

安部栄四郎は自らの手漉き和紙の道の拓けたことについて、一九三一年六月の柳宗悦との出会いがきっかけという。島根に工藝探訪に来たさい、柳が厚手の雁皮紙を見て絶賛し、「ときもよくその頃限定版の出版時代となり、谷崎潤一郎、佐藤春夫、柳宗悦、寿岳

文章氏などの出版は相ついでこの雁皮紙を使用した」と記している。

いま上質の和紙を用いて書物を作ることは難しいが、その志だけは持ちたいと思う。この地球上に在るものすべてに理由があり、相互に支えあつてい

るといわれる。デジタル機器の進歩もアナログ的社会との共生の上でこそ意味をもつであろう。そういった意味で柳の始めた民藝運動が果してきた役割をいまいちど見直さなければならぬと思う。(志賀直邦)

たくみ企画展

“琉球の美”を伝える〈沖繩の手仕事〉特集

会期 七月三十一日(土)〜八月九日(月)

八月一日(日)、八日(日)は営業いたしません。

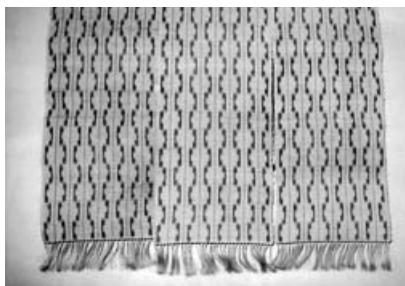
会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで(日祝日・最終日は十七時半迄)

柳宗悦はかつて(一九三九・昭和十四年夏)『琉球の富』という一文を著わし、沖繩の自然と文学、芸能、そして工藝や建築、門中墓などの豊かさ、美しさを感動的な言葉をもって綴っています。

六十五年前の、あの悲劇的な沖繩戦の惨禍を経験し、今なお復興の途上にある沖繩の、伝統的な手仕事の一端を紹介するに際し、柳の文の末尾の跋文の一節を記します。

「そうしてその数々の富の上に、沖繩の未来を建設することは、お互いの任務だと思えます。琉球よ、栄えあれ。」(S)



麻縞のれん (石垣島)



厨子型蓋物 (仁王窯)



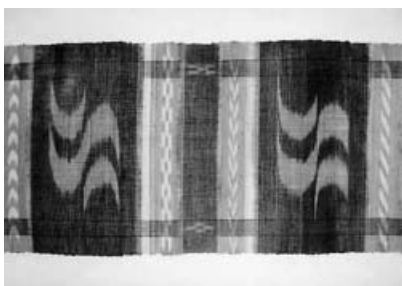
クバ扇、うちわ、芭蕉敷物、ほうき



コップと水差し (琉球ガラス)



二彩大皿 (松田米司)



みんな織 卓布 (八重山)



赤絵按瓶、赤絵土瓶 (仁王窯)



三足盆 (琉球漆器)



ロートン織 卓布



点文四耳油壺 (金城次郎)



唐草文茶壺 (金城次郎)、
高膳 (琉球漆器)



かさ立て (松田米司)



吉祥文 藍型布 (首里)



丸盆 尺三寸 (琉球漆器)



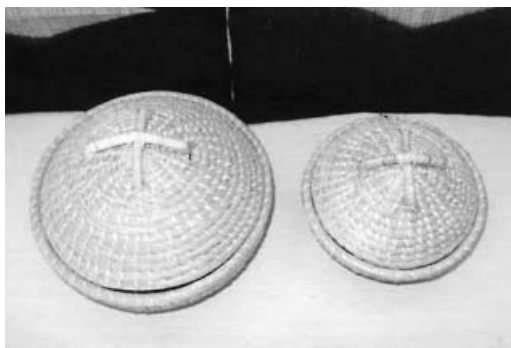
草花文 藍型布 (首里)



厨子がめ (荒焼)



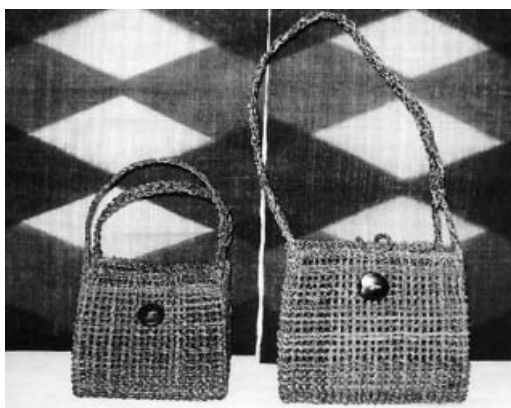
三耳壺 (荒焼)



茅容器 (石垣島)



木枕 (琉球)



バンドバック、ショルダーバック (石垣島)



クバ笠、アダン葉ぞうり (石垣島)



壺屋の風景

たくみアーカイブス 蓑(みの)物語

上野 訓治

いまから十数年前のことでした。新庄(山形県)の町は、すっかり雪に埋もれて、家のひさしだけが並んで見えるくらいでした。

ここでは毎日朝市がたちます。柳宗悦先生と一緒に街角に立って行き交う人々の姿を見とれていました。頭にはさかさ帽子(にぞという)をかぶり背中には美しい蓑をつけています。東北でもこの辺の風俗は特色があつて、私達の目をよるこぼせてくれました。

柳先生はどれか一枚民藝館のために欲しいといわれました。その時ふと道路の片隅に座つて干魚を売つていたお婆さんが敷いていた蓑が、目に沁みこむように映りました。

先生は早速交渉を始められました。が、このお婆さんは頭を左右に振つて

なかなか縦には振りませんでした。あまりの熱心さに心が動いてか、一緒に物を売つていた仲間と何かひそひそと相談していたようでしたが、やっと手放すことに話が決まりました。なにがしかの金を支払つて、よろこびいさんで、鬼の首でもとつたように……、その夜は新庄ホテルの床の間にかけて美しい仕事を讃えながら床につきました。

丁度時計が十一時を打つた頃でしょうか。誰か訪ねてきたというので、玄関に出てみると先刻の婆さんが、金は戻すから蓑を返してほしいといつて立っているのです。せつかく手に入れたものを惜しいので、押し問答を繰り返しましたが、ついに負けてしまいました。

お婆さんの話をきくと、もつともでもありました。最上地方の古くからの風習として結婚の話がきまると、お婆さんが嫁いでくれる彼女のために精魂こめて、美しい蓑を作つて贈るのです。結納の日に仲人はこの蓑と酒樽を背負つて行きます。やがて晴れの結婚式に花嫁はこの蓑を着て一生楽しく働きましょうと新夫に誓います。いわば大切な晴着で、お里帰りや正月などに花嫁が誇りやかにつけるのです。

蓑はお婆さんにとっては忘れがたい思い出の品でありましょう。幾十年か苦楽を共にした夫は他界し、今その形見として残されたものを金に換えたというので、家族のものや隣近所の人たちに叱られたそうです。先生も納得して返すことにしました。デパートで買った品で儀礼的に贈る都会の結納に引きくらべてはるかに心が温まる思いがしました。

物語はこれで終わつた訳ではありません



最上地方の蓑

「新庄で婆さんが往來に之を敷いて其の上に座り、野菜を売っていたのを、頼んで譲り受けた」(柳宗悦)
写真、柳の文とも『工藝』第74号より

せん。翌年、先生は忘れもせず、ふたたび新庄を訪れて、このお婆さんを探して、宿望の蓑をさげてかえってこられました。

先生は民藝館の意義をよく説明されたそうです。お婆さんも案外物わかりの良い人であつたらしく、自分は余命いくらない年齢であり、万一死んだ場合、だれがこれを保存してくれるかということ、結局民藝館に陳列されれば多くの人々に讃えられ、形のある

限りいついつまでも保存されるわけで、快く同意したということです。『虎は死して皮を残し、お婆さんは死して蓑を残す』というわけです。

付記 『蓑』は日本書紀にこの字が載っており、古くからあつたようです。しかも、現在も全国いたるところで作られています。元來の用途は雨衣でありましたが、これを分類しますと雨みの、田みの、山みの、腰みの、馬みの等各種のものがあります。野良で働く

き、旅に出るとき、雪や日除けにも使われ、型もさまざまであります。これを大別して二種類に分けることができます。

一番多く見られるものは藁で作った雨除けのもので、一般商品として大量に作られたものです。他の一つは地方語で「けら」と呼ばれる自家用に作られるものです。前記の物語にある蓑はこの類に属するものです。

材料も左記のようなものを使い、永い月日を費やして作ります。

- 1、くど(山の湿地帯に生える青草)
 - 2、蒲(沼、沢などの淡水中に自生する宿根草)
 - 3、みご(稲の芯)
 - 4、すがも(海藻)
 - 5、まだ、まんだ(シナ木皮)
 - 6、つりき(まだより赤味を帯びる)
- 『月刊たくみ第五号・昭和二十八年二月発行』より。筆者は当時、たくみ社入担当者)

染色家・三代沢本寿さんと松本での展覧会のこと

志賀 直邦

先般、四月十七日から六月六日まで
信州松本の市立美術館において「型絵

染・三代沢本寿・生誕一〇一年展」が
開かれた。この段取りには周到な調査
と準備が必要

と準備が必要

で、ご苦勞も
あったことと思
う。三代沢本寿
さんの名前は、
私が民藝運動の
仲間に入った初
めのころ、つま
り一九五五（昭
和三〇）年ごろ
からよく耳に
し、またたくみ
へもお見えにな
ることもしばし
ばだった。

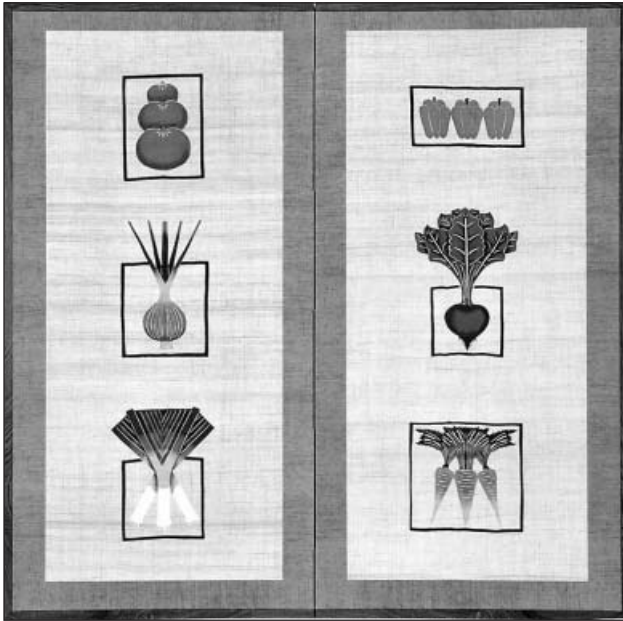
太平洋戦争の

終戦後、復興も軌道にのったその年、
戦後初の「日本民藝館展（大丸）や「新
しい生活工藝展」（三越）、「全国民窯展」
（松坂屋）、そして富本、河井、濱田、
棟方ら後に巨匠といわれる工芸家たち
の第一回の百貨店での個展がスタート
したのであった。

他方で芹沢銈介の主導した染色家集
団萌木会（十二月・東横百貨店で「萌
木会染色展」開催）や、集団による協
業的量の仕事を意図した芹沢染紙研
究所も、この年の前後相次いで発足し
た。

そのころ多くいた染色作家たちの中
で、作品制作だけでなく、柳宗悦たち
の地方行脚や各地民芸品の調査に積極
的に参加し、協力を惜しまなかった一
人が三代沢さんであった。

雑誌「民藝」の一九三九年から四四
年まで、そして戦後の五五年一月号か
らの復刊「民藝」において、三代沢は
結構積極的に自らの調査報告を投稿し



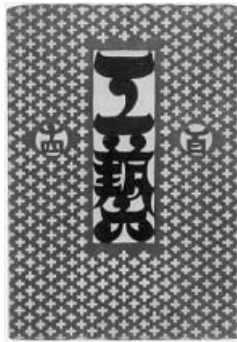
屏風 蔬菜の図



屏風 南北東西



季刊『信濃路』第44号



『工藝』第114号

ている。その一部を記そう。
 「本棟造りの民家」、「安曇の帯縞」紙子について、「染紙の事」、「信州の道祖神について」、「中部地方の民藝品」、「信州の織物」、「木曾の開田村」など。

なかでも開田の麻布については、その美しさと復興への協力については、当時議論が沸騰したことを覚えている。しかし三代沢の真骨頂はなんといつても染色作品の制作である。型絵染め

の技法が中心であるが、模様、素材、技法、色彩、用途など多岐にわたり、それらがいずれも日用、身の品々であることに感銘する。

彼は一九三九年、三〇歳の時に柳宗悦と出会い、四二年には柳の編集する雑誌「工藝」の表紙制作を受け持っている。これは月刊で各月ほぼ千部、これをすべて手仕事による型染めで作るのだから並大抵なことではない。

「工藝」の表紙制作は、その担当月数の多い方からいえば、芹沢銈介、鈴木繁男、棟方志功、三代沢本寿であるが、これはすべて柳の直接指名であった。柳の三代沢の仕事への信頼のほどがうかがい知れるのである。

三代沢の屏風、のれん、着物、帯、卓布、装丁、その他の、多岐にわたる作品の数々については、松本の後、六月十五日から九月五日まで、愛知県豊田市民芸館で開催される同名の展覧会をご覧ください。

随想

戒石銘

瀧田 項一

民藝とは全く関わりのない話になるが、昨今なにかにつけ、政治と金、税金の無駄遣いと取り沙汰され、紙上を賑わしているが。



戒文が刻まれた巨大な自然石

江戸期奥州は二本松藩丹羽高寛公の居城。その東門は藩士達の藩庁に通う通路である。その傍らに、露出した巨大な自然石に刻まれた戒石銘がある。四句十六文字を刻みこんだもので、五代藩主高寛公が藩士達の戒めとするために、藩の儒学者岩井田昨非に依り、古代中国後蜀時代の人で孟昶の詩文を起用した言葉である。



戒文

なんじのぼう なんじのろくは

爾俸 爾禄

たみのこう たみのしなり

民膏 民脂

かみんは しいたげやすきも

下民 易虐

じょうてんは あざむきがたし

上天 難欺

つまり、お前がお上から戴く給料は

民の汗と脂の結晶である

下々の民は虐げ易いけれども

神々を欺くことはできない

とのことである。

毎朝藩庁に出勤する藩士はこれに依つ

て土風を奮い起こし、日々の戒めとし

たのである。

当世、この戒名銘こそ官民肝にめいじ

て戒めとすべきではないかと先刻二本

松城を訪ね、感銘深く思えて、敢えて

ここに記する次第である。

(日本民藝館評議員・陶芸家)

「宗悦忌」俳句大賞

三浦 正宏

平成二十二年柳宗悦五十回忌を記念する「宗悦忌」俳句会が秋田手仕事文化研究会の主催で開かれた。この句会には二十六都府県五十七人から二百二十四句が寄せられ、このうち大賞一句、特選五句、入選二十句が選ばれた。
選者は小柳金太郎氏(樺細工)、富樫晶子氏(童子吟社同人)。名誉選者は水尾比呂志日本民藝協会会長。

大賞

宗悦忌緯ぬきのシャトルのすべる音

秋田県 京野菜穂子

特選

道づれに心偈あり宗悦忌

東京都 笠間 達男

赤べこのうなづき返す宗悦忌

新潟県 鈴木 清

五箇山の和紙漉く音や宗悦忌

新潟県 遠藤 辰也

白杖を弾ませ初夏の民藝館

千葉県 山崎 光子

手賀沼を友漕ぎ来る宗悦忌

東京都 皆川 燈

入選

縄ないし父をも偲ぶ宗悦忌

福島県 酒井美智代

将棋駒彫る影とどむ春火桶

山形県 和田 壽三

ばば様の見よきところへ吊し柿

茨城県 高野射手男

雪国のたよる副業わら作り

山形県 小松 忠治

手に馴染む白岩焼や荒走

秋田県 加藤 勝衛

越後上布涼しさ雪を着る譬え

新潟県 遠藤 辰也

真鍮の天秤皿や宗悦忌

新潟県 仲村千枝子

あしたまたもうひと手間を沈丁花

秋田県 五十嵐 修

宗悦忌椎の大樹に呼ばれけり

東京都 皆川 燈

菅笠に墨書の屋号宗悦忌

新潟県 鈴木 清

蠟梅を漆の桶に光差す

岐阜県 倉坪 安成

今になほこころに火種宗悦忌

新潟県 土屋 瞳子

民藝茶会主と客そろい宗悦忌

青森県 会田 秀明

黄八丈織る八十や宗悦忌

佐賀県 伊東 幸子

宗悦忌「好醜なし」と美の法門

宮城県 大嶋 勤

永き日を今ヨリナキニ宗悦忌

岡山県 石井 みや

ぬくもりは確かな仕事にかくれおり

新潟県 遠藤 洋子

心偈ひとつつぶやき出勤す

東京都 藤田 邦彦

キルト展歩き疲れて草の上

兵庫県 福島 淑子

この椅子の背になじむや宗悦忌

秋田県 富樫 晶子

たくみ歳時記 陶の蚊やり

近ごろ、鳴く虫も蚊も少なくなつたとはいえ、今宵も窓を開けての夕涼みのおり蚊は人肌を刺すのである。蚊取り線香の香りは、器の蚊やりとともに今なお身近に不可欠であろう。

東京では江戸時代から今戸焼の豚の蚊やりが知られたが、つい先年なくなつた。そこでいまたくみで取り扱う

手作りの三種を紹介しよう。

上から、信楽焼(滋賀県)の品、次は茨城県・真壁の瓦焼きの品、そして美濃焼(岐阜県)の鉢型の蚊やりである。

蚊やりは、線香の火の温度が想定以上に高いため(四〇〇度位)、耐火性の陶土でないと永持ちせず割れてしまう。だから普通の食器作りの窯の品ではあまり役にたたないのである。

(S)



陶器の蚊やり 三種

あとがき

六月の終りの三日間、秋田市で日本民藝協会の夏期学校があった。講師による講義や初期民藝運動のビデオ、展示会などの見学が行われ、最後に県産の伝統産業の従事者による作品解説と質疑応答が行われた。樺細工の八柳さん、川連漆器の躑躅森さん、そして大館曲げわっぱの浅井さんであった。

道具や素材を持参し、技と生活に根ざした話だけに聴講者の質問も具体的に、お互いに有益であったと思う。天然の材料の美しさ、丈夫さに納得し、しかし材料の枯渇や作者の高齢化に心を痛める。だがなによりも人々の生活様式の急速な変化によって、暮らしの中でこれらの品が必要とされなくなつたことがつらいのである。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一—二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三—三五七—二〇一七

FAX 〇三—三五七—二一六九

振替 〇〇—一〇—二—三五六五九

定価 六〇円(税込)